

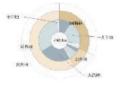
我が国の森林資源の現状

日本の国土面積の68%が森林で覆われている。(図1、2)

しかし、我が国林業が抱える一つの問題に、国内で使用される木材の 多くを輸入材に頼り、国内森林資源を放置し、荒廃させていることが 挙げられる。この一つの原因は、国産材の流通にその一因があるとい われている。

国産材の流通は、森林所有者が零細で、生産・流通・加工の各段階が 小規模、分散、多段階である為、品質・性能の確かな資材を低コスト で安定的に供給する体制が確立されていない状況にある。その為いく ら政府が国産材利用の拡大に向けた取り組みとして、各方面での木材 利用の推進や、木材加工施設の整備を行ったとしても、根本的な解決 には至っていないのが現状である。

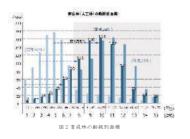
しかし果たして流通システムの改善だけに林業の活性化を任せてしま ってよいのだろうか。私はそれと同時に、林業の置かれた状況を把握 しない多くの国民に、少しでも我が国の林業が置かれた状況を理解し てもらう必要があると考える。



約 2500 万 ha (日本の森林率 68.2%)

: 1460 Ti ha (58%)

図1日本の森林資源の面積割合 林野庁 HP 平成 24 年度森林・林業白書より



2 我が国の里山の現状

日本では、かつて田んぼや草地、雑木林などの 植生をただ自然任せに遷移させずに人間と共生 しやすい状態に維持する「里山」地域が存在し た(図3)。

しかし、第二次世界大戦戦後エネルギー源と農 業形態が変化し里山地域が衰退する(図4)と同 時に、時代の流れとともに都市は拡大や縮小を 繰り返し、里山では景観が崩されたのみならず 、都心回帰した工場や大学のキャンパスの跡地 が管理放棄され、荒廃した我が国の森林の状況 の二の舞になっている(図5)。

時代による都市と里山の範囲の変化



「都市」地域の拡大化

人口は大都市に集中し、従来の都市範囲には収容不可能になり、 地方からの移住者や大都市から脱出した住民は鉄道で都心に通勤 できる郊外に住むようになった。

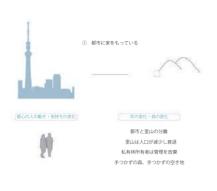
「都市」地域の縮小化 図 5. 第 2 次世界大戦後 (近年) 「甲山」地域

里山を切り崩し既に拡大した市街地は空白になる →未だにその後の活用がなされていない地域・建物がほとんどである

工場や大学のキャンパスを管理する人もいなくなり里山地域には森 林の管理放棄と同じような状況が丁場跡地でも起きている

3 里山と都市を紡ぐ空間

日本の森林資源及び里山は衰退しているが、林業に興味を持ち、自然あふれる田舎地域に暮らすことを希望している人は少なくない。 そこで、里山地域の工場跡地をリノベーションし、田舎生活を目的として、都心部から週末を過ごしにくる人や、定年退職し、田舎に移ってくる人の ための、シェアハウス及び地域の人と関わりを持てるコミュニティ族設を計画する。







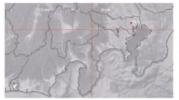
町の変化・森の変化

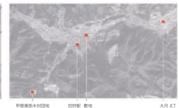
シェアハウスの住民が地域住民となる 里山の問題点をともに考えるひとが増加 都市と里山とが紡がれる

4 敷地

敷地は都心からのアクセスを考慮し、東京から電車もしくは自動車で2時間以内で行くことが可能な地域を選別し、その中から山梨県大月市の工場跡地(写真1)に注目した。

敷地周辺には甲斐東部木材団地という地域木材の加工所があり、山梨県の東部の地域木材の加工をここで まかなっている。







2. コミュニティ施設

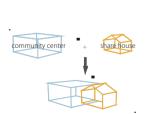
3. 木質バイオマスエネルギー発電



5 空間構成

■シェアハウスとコニュニティ施設の交ざり方

コニュニケーションとはどのようにして生まれるのだろうか。 いつ、どのような状況の時に人と人とが交流するのか。 シェアハウスとコミュニティ施設とを関わらせる手法とはどのような形なのだろうか。





コミュニティ施設とシェアハウスとを合わせるだけではシェアハウス住民と地域の人とのコミュニケーションは生まれないだろう。

まだ地域に慣れていない都市移住者(シェアハウス住民)と地域の人とを交流させるためには、少し強引にでも、お互いの空間を交じわせることが必要だと考えた。

ブライベートなシェアハウスの空間のセキュリティーを確保しつつ、オーブンであるコミュニティ施設と関わらせるために各スラブにレベル差をつけた空間構成を提案する。



里山を体験する

都市からの移住者の居住スペース 個室空間は完全に独立しており、リビングやダイニ ングはコミュニティ施設に交ざり合っている

地域の集いの場

甲斐東部木材団地の森林組合が管理をし、山梨県の 森林資源の情報を発信する中と同時に、地域の人と シェアハウス住民とがコミュニケーションをとって いく

図書・勉強スペース …地域の図書館、

シェアハウスの書斎 林業についてもこの図書館で学ぶ

フや、外部側師による、地域材を使っての工作を行う …SIMPLE WOOD「まるき」のギャラリー

里山地域のイベントの会場にもなる
レストラン ・・・作業したあとに一息入れる場所
休憩スペース コミュニケーションが生まれやすい

里山生活を再生する

甲斐東部木材団地で木材を加工する際に出る廃 材やチップを燃料に変え、シェアハウスやコミ ュニティ施設で利用する電力の一部を賄う 木材を燃料にするという里山で生まれた知識を 時代に合わせた形で利用する



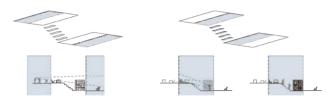






6 家具や光が導くコミュニケーションとは

人は日常生活の中でいつコミュニケーションを取るのか。家族と会話をする時を思い浮かべる と、食事をした後、お風呂に入った後、自分の作業をした後に一息を入れるタイミングが多い のではないか。各スラブが対面する位置に向き合うように家具を配置することで自分の作業に 区切りが付いたとき視線が合うことでコミュニケーションが生まれる。



自分の作業をしている時は周りは見えない為 別の空間の人とのコミュニケーションは生まれない

一息つこうとする時、心に除が生まれ 周りが視界に入り相手の存在に気がつく

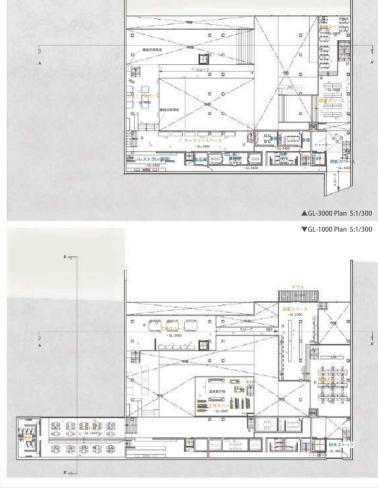
コミュニティが生まれる

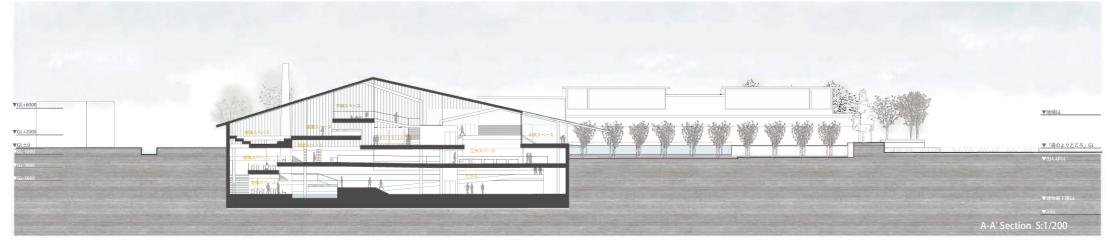
また、明るい空間では賑やかな、静かな空間では落ち着いた、それぞれ違ったコミュニケーションの取り方があるだろう。「光」は人の会話の内容や会話するときの気分を左右する要素のひとつとして考えられる。敷地での太陽高度に合わせて(図8)、トップライトを設け光の量によって部屋の用途を設定することで空間の雰囲気が決定する。

建築の空間構成だけでなく、家具の配置やその空間の雰囲気すべてがその場にいる人の気持ち に影響する。









7 里山風景への特等席

都市に住む人が里山に住みたいと思うきっかけは何だろうか。

開けた大地、建物の密度、穏やかに流れる時間、何よりも里山の自然風景を求めて移住したい と思う人は少なくないだろう。

シェアハウスの個室空間では、まず里山地域に住みたいと思わせるために里山の自然風景への 眺めを重視して計画した。

短冊状に並ぶ住戸は、部屋ごとにレベル差を設け、どの部屋からも入った瞬間に景色がひらける部屋となっている。また、住戸の壁の延長線上に樹木や庭のベンチ等を配置することにより、各住戸に里山風景の特等席が用意される。

この特等席にすわり、まずは3年間生活することで、里山を体験し、豊かさを感じとる事により地域に対して一歩近づくことが出来る。







